

海域の概要

本湾は、高知市中央部の南側にある湾で、湾の入り口幅 140m、奥行き 6 km という縦長の湾です。湾に流れ込む河川の数が多いことから、汽水性の魚が数多くすんでいます。



Specification

諸元

湾口幅：0.25 km

面積：7 km²

湾内最大水深：2.2 m

湾口最大水深：1.0 m

閉鎖度指標：2.328

備考：環境基準類型指定水域

Location

範囲または位置

高知県高知市浦戸大橋及び陸岸により囲まれた海域。



環境

浦戸湾には東から国分川、舟入川、下田川、西から久万川、江ノ口川、鏡川、新川川の主要7河川が流入しており、これらの河川の汚濁がそのまま湾内の水質に影響を与えています。

20年程前までは、浦戸湾の汚染源はパルプ廃液を主とする工場排水でしたが、水質汚濁防止法や条例により工場排水による汚れは少なくなっています。現在、汚れの原因の80%以上が、家庭排水によると考えられています。

平成2年～11年のCOD平均値は環境基準の3mg/l以下で推移しています。

自然

浦戸湾は、高知海岸から奥に10km程度入りこんだ湾で、その東岸は埋め立てが進み港湾施設となっていますが、西岸は緑も多く残っています。湾口には有名な桂浜が太平洋に面し、湾内は高知港として天然の良港になっています。

湾中央部には玉島、衣ヶ島が浮かび、河口部には夜間に水銀灯が点灯する浦戸大橋が架かっており、景勝地になっています。

流入河川が多いため、淡水域(ドジョウ、ウグイ、ギンブナ等)、汽水域(コノシロ、サツパ、キチヌ、ゴンズイ等)、海域(アカエイ、ボラ類、タイ類)の多様な魚種がみられます。特に、汽水性のものが多く、魚類の種類数は、194種を越えると言われています。



浦戸湾と高知港

文化歴史

承平4年(934年)、紀貫之が著した「土佐日記」に「大津より浦戸をさしてこぎいづ」という文章があり、今から1000年前の高知市は海水に覆われ、浦戸湾は今よりもはるかに内陸に入り込んでいたことが伺えます。現在の久万川流域などもほとんど入海であったこととなります。

その後400年、大高坂山で南北二流に分かれて風光明媚な浦戸湾に注いでいた鏡川は、土砂によって次第に湾口を埋め、三角州を形成し、大高坂山を中心とした土地を出現させ、海をめぐらした要害堅固な地になるに及んで、南朝の忠臣大高坂松王丸がここに城を築いたといわれています。

産業

浦戸湾域の代表的漁法として、主にエビを対象とした火光利用叉手網漁法、カニ、クロダイ等を対象にした刺網漁法、はえ縄漁法、シラスウナギ漁、投網漁法、大正網が行われています。

高知市を臨む高知港は、古くから阪神地区と南四国を結ぶ海の玄関として機能している天然の良港です。四国三架橋、四国横断自動車道の開通により、「西日本の海の玄関口」として注目されています。

湾岸の観光スポットとして、桂浜や湾奥にかかる「はりまや橋」があります。



桂浜